リレー随筆

博愛の心

沖縄県立宮古病院循環器内科
米田　恵寿

日常の診療に追われ自宅と病院の往復というきわめて単純な生活に変化と学ぶ習慣を身につけるために昨年からドイツ語を週1回学んでいる。私の生まれた旧上野村は博愛の里とも言われ、ドイツとゆかりの深い土地柄である。平成8年上野ドイツ文化村が完成し、ドイツの若者が国際交流員として派遣されドイツ語の翻訳・通訳としてドイツ語講座やドイツの文化の紹介を行ない島の人々と交流を深めている。そのドイツ語講座に参加している訳である。ドイツと宮古島市のなり染めについて文献的考察を含めて紹介したい。

今を去ること133年前の明治6年（西暦1873年）7月9日にドイツのハンブルグ港籍の商船R.Jロベルトソン号（全長40m、幅12m）は中国の福州から茶を積んでオーストラリアのアレーデ向けに航行中、暴風に遭った。マスト2本を失いドイツ人船員2人はマストにて打撲し死亡、ボート2艘流失し漂流した。7月11日宮古島市上野宮国海岸から約900m沖合の大干瀬で座礁難破した。ロベルトソン号の遭難の近くを航行した英国船も難破を目撃し小船を出して救出しようとしたが危険なために救出できなかった。そうこうしているうちに遠見番の役人がこれを発見し、島民がクリ舟で救助に向かったが風波が強く船に近よれず、断念した。その夜は一晩中陸からかがり火を焚いて船上の乗組員を励ました。翌日、激波のなか我が身の危険も顧みず、2艘のクリ舟をくり出して遭難船に着くことが出来た。ロベルトソン号にある1艘のボートと合わせて3艘で生存者8人（ドイツ人6人うち女性1人、中国人2人）を救出した。役人等は在番所を彼らに提供し、役人は周囲に仮屋を造り宿泊した。当時の島民の主食は黍であったが、彼らには一日三回、米、鶏肉、魚を含んだ食事が与えられ手厚く介護されたようである。

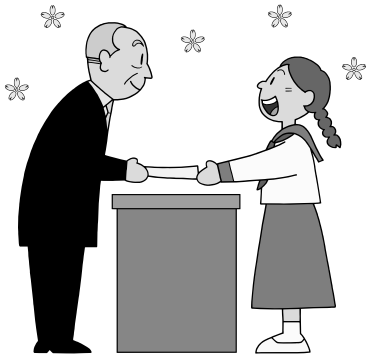
ロベルトソン号船長のエドワルド・ヘルンツハイムの日記では遭難時の状況、島民との出会い、島民の習慣、生活様式、食べ物、自然、儀式、医療、宗教、産業などが、細かに記載されている。船長エドワルド・ヘルンツハイムの日記の中で興味深い事は、島役人は自分のことを指しながら「Me（ミー） Typinsan（タイピンサン）（太平山:宮古の古い名）men（メン）,you（ユー）？」とか「Drink（ドリンク） tea（ティー） all（オール） men（メン） drink（ドリンク） tea（ティー）.」とか片言の英語を話されたようである。ロベルトソン号が遭難する数年前にもイギリス船、フランス船も宮古近海で遭難し救助され官船を与えられ帰国しているが、その時に英語、フランス語を習ったようで、僅かながらもこれらの言語を解したようである。島人との意思の疎通は、はじめは身振り手振りで困難であったが、島人が、「Speak（スピーク）」という単語を覚え、船長が何かに手を置いて「Typinsan（タイピンサン） Speak（スピーク）？」と聞くとその単語を島人が教えて、同時に英語の表現を聞き返して、双方がその発音をそれぞれの文字で記載して意思の疎通が可能となったようである。また、現在でもそうであるが、当時の宮古人はアルファベットのL音を全く発音することができず、その替わりRと発音したのでtwo（トゥー） men（メン） lost（ロスト）はtwo（トゥー） men（メン） roast（ロースト）となってしまうなど細かな観察の記載も見られる。エドワルド・ヘルンツハイム日誌で彼らを感動させたのは、島民の私欲のなさであった。上陸後の船員に対する処遇、貧しい暮らしながらも食材の提供、医療行為に感激した船長が何らかの謝礼を出そうとしても、島人は全く受けとらなかった。しかも、ジャンク船まで与えて帰国に寄与するなどである。34日間の滞在が終わり、出発の日には漲水港に島民が集まり鐘や太鼓をたたいて見送った。役人達はくり舟を仕立てて水先を案内し、島影の見えない所まで見送った。三晩と四日の航海を経て無事、台湾の基隆港に着き英国の汽船で中国へ渡りドイツに帰国した。この島の人々は西側の文化の影響を

まったく受けていないのにも関わらず、文明と宗教が義務づける博愛の心を我々難破者に対し当然の如く示してくれたと讃えて日記を終えている。

帰国後に自らの悲惨な体験を「ドイツ商船R.Jロベルトソン号宮古島漂着記」として新聞に公表し、これがドイツ国内で大きな反響を呼び、時の皇帝ウイルヘルムI世の知るところとなった。感激した皇帝は宮古島に感謝の記念碑を建立するために、救助から3年後の1876（明治9年)、軍艦チクローブ号を派遣した。記念碑は、ウイルヘルムI世の誕生日である3月22日、漲水港が眼下に見えるウヤグス（親越）の地に建てられた。これが縁で宮古島の人々はドイツ国に深い親近感を持ち交流を深めている。最近では2000年の沖縄で開催された主要国首脳会議（サミット）で、会議に先立ってゲアハルト・シュレーダードイツ首相が宮古へ訪れ交流を深めている。2006年11月にはエドワルド・ヘルンツハイム船長から数えて4代目の末裔にあたる骨髄移植で世界的に有名なゴスタ・ガールトン（スウェデンのカロリンスク大学医学部教授）が初めて宮古島を訪問し、ロベルトソン号を救助した住民の子孫と交流を深めている。

辞書で調べると博愛とはすべての人を広くわけへだてなく愛することと書いている。人にはだれにでも大なり小なり備わる心だと思う。マスコミで取り上げられている学校でのいじめ問題、夫婦や親子や兄弟間の問題、テロ、戦争など人と人の関係が緊張しているのが、今の世相だとも思う。我々は先人達が示してくれた博愛の心を今一度再認識し実践する必要がある。そんなことを思いながら日々の診療を行なっている今日この頃である。

★リレー状況

－平成16年以前掲載省略－

42. 宮城茂先生（独立行政法人 国立病院機構 沖縄病院）Vol. 41 No. 2
43. 祝嶺千明先生（しゅくみね内科）Vol. 41 No. 3
44. 宮城裕二先生（みさと耳鼻科）Vol. 41 No. 4
45. 親川富憲先生（おやかわクリニック）Vol. 41 No. 6
46. 折田均先生（ハートライフ病院）Vol. 41 No. 7
47. 湧田森明先生（わくさん内科）Vol. 41 No.9
48. 宮良球一郎先生（宮良クリニック）Vol. 41 No.10
49. 蔵下要先生（浦添総合病院）Vol. 41 No.12
50. 樋口大介先生（独立行政法人 国立病院機構 沖縄病院）Vol. 42 No.3
51. 古謝淳先生（南山病院）Vol. 42 No.5
52. 城間清剛先生（城間クリニック）Vol. 42 No.7
53. 野原正史先生（のはら元氣クリニック）Vol. 42 No.10
54. 久貝忠男先生（沖縄県立南部医療センター・こども医療センター）Vol. 42 No.12